

氏名	丸山諒士
学位の種類	博士(比較文明学)
報告番号	甲第529号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	モナド論の〈非神学的解釈〉——ライプニッツの無限論を軸に
審査委員	(主査) 佐々木一也(立教大学大学院文学研究科教授) 林文孝(立教大学大学院文学研究科教授) 佐々木能章(東京女子大学現代教養学部教授)

# I. 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

- 0.0. 序——本論の視座の共有のために
  - 1.0. ライプニッツの無限論及び人間の有限性
    - 1.1. ライプニッツにおける数学上の無限
    - 1.2. ライプニッツ哲学において何が現実的無限か
    - 1.3. シンカテゴリマティックな現実的無限の再解釈
    - 1.4. 現実的無限と人間の有限性との関係の解釈
      - 1.4.1. 神学的解釈——どこまでも神の知性に向けて進歩する
      - 1.4.2. 非神学的解釈——どこまで進んでも神まで無限に遠い
  - 2.0. ライプニッツ哲学における無限と偶然性
    - 2.1. 様々な偶然性擁護理論
    - 2.2. 様々な偶然性擁護理論の関係
    - 2.3. 二重の偶然性の解釈
      - 2.3.1. 〈神学的解釈〉——世界外在的な偶然性への一本化
      - 2.3.2. 〈非神学的解釈〉——偶然性の二重性の維持
  - 3.0. ライプニッツ哲学における無限と最善世界の最善性
    - 3.1. 比喩表現への着目——*ouvrage* としての世界の完全性
    - 3.2. 比喩表現の整理と相互関係
    - 3.3. アポリアの解釈
      - 3.3.1. 〈神学的解釈〉——芸術の比喩の幾何学的比喩への還元
      - 3.3.2. 〈非神学的解釈〉——芸術の比喩を維持する
  - 4.0. モナド論の〈神学的解釈〉と〈非神学的解釈〉
    - 4.1. 〈神学的解釈〉のまとめ
    - 4.2. 〈非神学的解釈〉への凡その道筋——フオイエルバッハの諸思想をヒントに
    - 4.3. 〈非神学的解釈〉の構築
    - 4.4. まとめ
  - 5.0. 終章
- 参考文献等

## (2) 論文の内容要旨

本論文は近代初期のドイツの思想家ライプニッツのモノド論哲学を、神の似姿で作られた人間が神に倣って世界認識を目指すという枠組みから敢えて外れたところで解釈することによって、一元的に序列化整理される現代世界がライプニッツ哲学の必然的帰結でないことを示そうと試みる。

0.0.序で、キリスト教信仰に基づきながら現代の普遍記号論に通じる合理的哲学の原理を提示したライプニッツのモノド論が、現代文明の「分断」と「画一化」の遠因となると同時に、文明を別の方向に導く可能性を持つ見通しを明らかにする。前者に繋がるモノド論解釈を神人同型性が前提になる「神学的解釈」、後者に繋がる解釈を「非神学的解釈」とする。ライプニッツ哲学は前者に馴染む立場にあるように見えて、彼が微分積分法の開発者であることから無限と有限をつなげる発想をも含む。両者の繋がりを手掛かりに、ライプニッツ哲学を神との直接的関与なしに理解し、現代思想の確固たる合理性に対して多様性と流動性に根拠を与える見通しが述べられる。

1.0.で、本論はライプニッツが世界に「現実的無限」を認めながら数学上の「無限数」を認めないという特有の矛盾を孕んだ無限概念を持つことに注目する。無限数とは例えば最大数の事だが、ライプニッツによれば無限であればそれを超える数が存在するので最大数は特定できないゆえに矛盾概念である。最大数や無限の要素を含む全体はカテゴレマティック(自義的)、特定できない開かれた無限はシンカテゴレマティック(共義的)とされる。自然数の多さ、物質の分割可能性の多さ、モノドの多さなど、ライプニッツが認める「シンカテゴレマティックで現実的な無限」という概念を巡る先行研究の論争の精密な検討の結果、それらがいずれも無限の系列についての神による予定調和に寄り添う神学的解釈による理解でしかないことを明らかにする。一方で、モノドの固有の表象による個性性に定位してモノド同士の相互の異質性に着目すれば、統一基準で列挙できない意味で相互に異なることがライプニッツの言う現実的無限である。このことはライプニッツの無限概念が神の視点に寄り添う必要のない非神学的解釈を許容することを意味する。

2.0.では、予定調和の立場にあるものの事実の偶然性を支持するという一見矛盾したライプニッツの主張に着目して、偶然性の非神学的解釈を切り拓く。その鍵となるのが「偶然的真理(他のようでもよかった)の無限分析説」(証明手続きの無限性)である。複雑なテキスト分析と先行研究の周到な検討により、無限分析説に基づけば偶然性の根拠が世界外の神という一点に集中することなく、世界内在的に無限に拡散してどこにも最終根拠が見出されないことが明らかになる。

3.0.では、無限な最善世界の最善性、調和や秩序の意味からモノド世界の無限性の非神学的解釈を導出する。ライプニッツは世界を神の作品に譬えるが、その感性的芸術性は知性的神にとっての矛盾ゆえに神学的解釈はその比喻を意味ある譬えとして認めない。だが神は創造のすべての過程に関与するので創造の一瞬においてその後は自動的に組み立てられるように論理必然的にのみ作るのでない。ライプニッツは偶然を認めている。そこに美の価値を認める非神学的解釈の余地がある。

以上から本論文では、ライプニッツのモノド論には多様性への志向があり、その哲学が世界の多様性を無限に解釈し続けるという過程を踏むことの必然性へと導くことを結論としている。そしてライプニッツ哲学に、一点に収斂する自然科学的世界観だけでなく、世界の多様化とそれらの相互連帯を模索する現代的課題に示唆が得られる解釈の可能性のあることを明らかにした。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、ライプニッツのモノダ論という形而上学的理論の解釈を巡って、従来とは異なる神人同型性を前提にしない解釈がライプニッツのテキストに即して可能であることを、ライプニッツの多様なテキストの精密な読解と多種の先行研究の綿密な検討に基づき明らかにしている。その意図は、従来ライプニッツ哲学の正統の流れをくむとされてきた自然科学の徹底的合理主義と世界の一元論的統一理解とは別の道をライプニッツ哲学が用意していたとも考えられることを明らかにしようとする、意欲的かつ大規模な、比較文明学研究として誠に相応しいものである。しかも、この作業をライプニッツが残したメモ、書簡、著作、など、主にラテン語とフランス語で書かれた多様なテキストを読み解き、英語圏やドイツ語圏を含む先行研究や関連思想家の文献を渉猟しつつ、詳細かつ緻密に、ライプニッツのテキストから豊富に例証を引きながら論じている。哲学研究としても第一級の論文である。

### (2) 論文の評価

本論文は以下の点で高く評価される。

#### ①独創的な問題設定と高い分析力

ライプニッツ研究の主流である「神人同型性」を前提とする解釈を敢えて疑い、ライプニッツのテキストからキリスト教信仰を前提とせずとも理解できる学説を抽出し、それをモノダ論の趣旨に抵触することなく整理して見せたこの研究は、ライプニッツ研究の流れに一石を投じ、大きな波紋を生むものと考えられる。その精密な論の冴えやライプニッツのテキストに切り込む分析力は高い評価に値する。

#### ②問題射程の遠大さ

画一化と分断という現代文明の問題の根源をライプニッツ哲学まで辿り、現代数学や自然科学一般に通じる無限概念の論理的扱い方にその端緒を見出した。このことは数学や自然科学全体の意味づけの変更を可能にし、現代文明の進化の方向性にも影響を与える大きな射程を持っている。科学的進歩を信奉する現代文明に対して根本的な批判の手掛かりを提示していることは評価できる。

#### ③研究手法の堅実さによる信頼性の高さ

ライプニッツは体系的著作家ではない。それゆえ一つのテーマについてのテキストが著作、メモ、書簡などに散在し、年代によって微妙に主張が変化する。著者はその経年変化や書簡の相手との関係などを十分に考慮しながら文献学的考証をも加えて立論している。この点は審査委員会でも特に高く評価された。

#### ④全体的に漲る研究力

本論文で参照された文献の質と量、射程の大きさ、緻密な議論、独創的問題設定、いずれも著者の力量の大きさを物語る。今後、今回の論理的側面だけでなく、ライプニッツの他の多様な側面をも取り入れた研究で、本研究がさらに深まることが大いに期待される。

以上を以て、審査委員会は本論文を第一級の比較文明学博士学位論文と認定し、高い評価を与えるものである。